

雑多ランゲージによるビルディングスケープの創出
— 人々の能動性を包摂する建築群 —

21918044 野田 理姿
指導教員 宮 晶子 教授

雑多性 画一性 遭遇
視覚 身体 再開発

1 制作の背景と目的

画一的に計画されたビル街では、沢山の物に溢れ多く
の人が生活をしているはずだが、冷たさや息苦しさを感
じる。しかし、私たちの生活の中には画一的な計画から
溢れた魅力が生まれている場所がある。例えば、店先ま
で商品が溢れ出ている商店街や、植木鉢など人々の生活
の一部が道に現れている路地などである。これらの場所
は様々なものや人が雑多に溢れ出ており、自分自身を受
け入れてくれるような温かさを感じる。このような、雑
多性を持つ場所こそが都市を生きる人々にとって本来の
居場所となるのではないだろうか。

現在都心では再開発が進み、これまで街にあった小さ
な雑多性は失われつつある。本制作では雑多性の分析か
ら画一的な建物に変わる建築物全体が雑多性を生み包摂
する建築群を提案する。

2 近代都市の画一性

コーリン・ロウも指摘しているように、近代都市は、
大多数の利益のために作られた都市である⁽¹⁾。経済的で
合理的なものが求められ、機能ごとに独立した画一的な高
層ビル群が立ち並んだ。また、建物だけでなく私たちの
生活の周りには合理性を重視したもので溢れ、同じよう
なものが広がっている。このように大多数という見えな
い対象のために作られた画一的な建物や物は、そこから
溢れた人々の活動との乖離を起し疎外感を生んでいる。

3 画一性と雑多性の違い

色々なものに溢れ、関わり合いが多く人々の活動が豊
かな空間に雑多性を感じる。画一性と雑多性を感じた場
所を写真に撮り、二つの違いについて分析を行う。



写真1 画一的な場所



写真2 雑多性を感じる場所

雑多性を持つ場所はものと人との距離が近いというこ

とがわかる(写真1、写真2)。また、歩いている時に何
気なく目に入った、服や鞄、知らない店や食べ物、本、
音楽、他者の行動や痕跡、横道や路地など、身近に潜む
偶然との出会いが生まれる場所が人々の生活を豊かにし、
本来の居場所となると考える。

4 雑多性を体験する方法

4-1 視覚/重層性

マーク・チャンギー氏は、私たちの目は片目だと
隠れてしまう部分を両目で補い合うことで認知するとい
う透視能力を進化させてきたと述べている。⁽²⁾この透視能
力は左右の眺めが少しでも変化する必要があり、両目の
視覚のずれよりも幅の狭いものが手前にあるとものを透
視し、奥にあるものを眺めることができる。私たちはこ
の透視能力を使うことができると、より多くの情報を視
覚から感じる事ができたと満足するのではないか。次に
雑多性と透視能力について分析する。



写真3 遠景の雑多性



写真4 近景の雑多性

異なる形のビルや、旗や植物、窓のサッシなど、微妙
な差異が複層的に重なりあっていることが分かる(写真
3、写真4)。このように雑多性を感じる場所は、両眼で
補いながら想像力を働かせより多くの物を認識すること
で脳が喜び、物との出会いが心を満たすと考える。

4-2 移動/遭遇性

身近に潜む予期せぬものとの遭遇はどのような空間体
験の中で生まれるのだろうか。別役実氏は、舞台上の空
間体験はB地点からC
地点に移動するとき、
視線よりも身体の方が
先行する為、最も身体
的に空間を経験すると

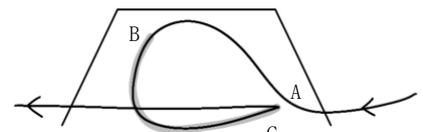


図1 舞台上の空間体験⁽³⁾

述べている⁽³⁾。この経験は目の前に広がる視界を予測することができず、現れた空間を身体的に経験してから認知する。その為先入観なく、より純粋に空間や事物を経験することができる。またこの現象は曲面や斜面、先の見通せない路地にも現れると考えられる。

5 雑多性の構成と手法

雑多性には隠れた構成理論があると考え、『パタン・ランゲージ』を雑多性の視点から考察し、以下の4つを構成理論として抽出し、手法とする。

1 厚みをつける

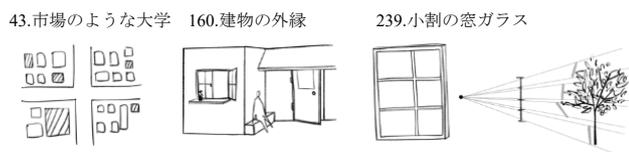


図2 プログラムや要素、現象に厚みをつける

2 接触面を増やす

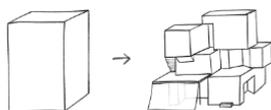


図3 領域や出入り口、プログラムを繋ぎ接触面を増やす

3 とどまる



図4 人や要素の配置の仕方、活動のとどまる場所を作る

4 重ねる

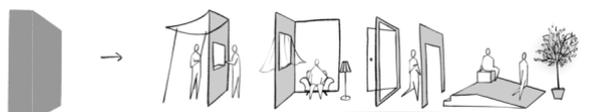
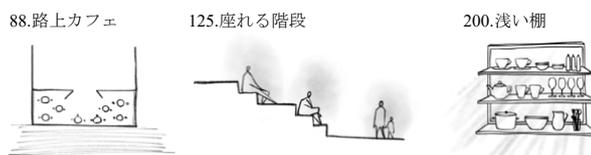


図5 異なるプログラムや空間、物を重ねる

6 設計提案

6-1 敷地

東京都豊島区西池袋一丁目のJR池袋駅の西口駅前を敷地とする。この場所は戦後ヤミ市が発展し人々の生活の拠点だった。その後、豊島区立池袋西口公園や東京芸術劇場が作られ、演劇や音楽、漫画、アニメなど様々なサブカルチャーが発展し、雑多性溢れる街である。しかし、池袋駅西口地区市街地再開発によりこれまでの街並みは失われ、画一的な超高層ビルが建設される予定だ。豊島区では財政難が予測されており改修工事費や維持費が多くかかる高層ビルは負担となる。またエレベーターでの移動が主になる超高層ビルは災害時に移動が困難となる。これらの理由から画一的に高く積み上げる超高層ビルよりも、一つ一つの場所に目が届き、豊かな空間が重なり合うような建物群が今後必要だと考える。

6-2 プログラム

オフィスや住宅、商業施設などが混在する建築群を提案する。プログラムは互いに関わり合うような構成とし、雑多性が生まれやすいようにする。

また、外部との接触面が多くなることを生かし、雨水の再利用や太陽光発電を行いインフラの一部を補う。

6-3 構成

かつてあったヤミ市の一軒の大きさである3畳をグリットとし建物を構成する。雑多性の構造となるL字壁や曲面の壁を配置し、更に雑多性を発展させる壁などを配置する。徒歩移動を積極的に促し、各階や段差をつけた床は階段やスロープで繋ぎ、曲面の壁を用いることで身体的に雑多性を感じる空間とする。そして、人々の能動的な活動を包摂する場所となり、雑多性がより発展していくことを目指す。



図6 提案

主要参考文献

- (1) コーリン・ロウ、フレッド・コッター：『コラージュ・シティ』，鹿島出版，1992．
- (2) マーク・チャンギージ：『ヒトの目、驚異の進化 視覚革命が文明を生んだ』，早川書房，2020．
- (3) 別役実：『別役実の演劇教室 舞台を遊ぶ』，白水社，2002．
- (4) クリストファー・アレグザンダー：『パタン・ランゲージ』，鹿島出版，1977．